

卒業後の私

山元 彬裕 (平成21年度文学部史学科卒業)

別府大学を卒業して～大学院への進学、小学校実習での出来事～

別府大学を卒業し、鳴門教育大学大学院の長期履修生として、3年間で多くの学びを経験しました。加えて、小学校教員免許も取得することができました。しかし、そもそも私の第一希望は、中学校社会科の教員になることでした。しかし、大学院2年生の9月に進路選択の大きな転機が訪れました。それが、大学生の時から数えて、2回目の教育実習でした。

6年生を担当した4週間の実習は、正直「あれ？」と思うことの連続でした。確かに、実習を行った学校の児童は、私がイメージしていた児童の姿とは違っていました。

学力が非常に低いことに加え、1年生のころから学級崩壊を繰り返してきたという背景がある学年でした。たとえ様々な事情があったとしても、社会科の楽しさを体験してほしいと思い、資料などをたくさん準備しました。しかし、結果は、教え込みの社会科に近い形になってしまいました。

原因としては、大きく2つありました。1点目は、簡単な発問の意味がなかなか理解できない。2点目は、板書しても、手元のノートに文字を書くことができない。そうすると、私が、社会科を通して身につけさせたいと思っていた能力の育成はできません。具体的には、資料などからイメージし、自分の考えを根拠とともに伝えることができるという能力の育成です。

毎時間、試行錯誤しましたが、不完全燃焼という思いが強く残りました。

小学校教員になると決めた2つの要因

私は、この小学校の実習後に、それまで、免許を取得するだけとしか考えていなかった小学校の先生になるかと決断しました。

小学校教員を本格的に目指した要因は2点あります。1点目は実習の最後に、子ども達から「先生、徳島に残って私達と一緒に中学校の先生になって社会科を教えてよ。とっても楽しかったよ。先生の社会！」と言ってくれた言葉が心に残ったということです。2点目は、不完全燃焼であったまま終わりたくないという思いが強かったということです。実習を経て感じたのは、社会科の表現力や技能の育成には、国語や算数といった他の教科から学ぶことで得ることのできる力が必要だと思いました。また、他教科で得た能力を社会科に還元していくことが、私自身の教育者としての使命であると考えたからです。

今、実際の現場にいて思うこと

小学校教員を選択したことに後悔は一切ありません。むしろ、現場にいて子どもと触れ合うなかで、決断は正しかったと思っています。小学校教員を選択して育成したいと考えていた子どもの姿にはまだまだ届いていません。そして、日々、本当に、たくさんの失敗をしています、その中から学ぶことを大切にしています。また、子どもの良さを最大限活かすために、小さなことでも褒め、良いところを伸ばせる支援を心がけています。

教職課程履修者の皆さんへ

幸いにも私は、教員採用選考試験の最終合格を果たし平成26年4月から山口県内の公立小学校の正規教員として働けることになりました。今後も、先ほど述べたような「いま思っていること」を大事にしながら学び続けていきます。

皆さんも、志を同じくする友人とたくさん語り、自身の教育観をもつことを心がけてください。必ず自分の力になります。